



宮沢賢治研究
Annual

Vol.27

2017

宮沢賢治学会イーハトーブセンター

ISSN 0917-334X



宮沢賢治研究 Annual 第二十七号

二〇一七年三月三十一日発行（非売品）

編集

宮沢賢治学会イーハトーブセンター編集委員会

〔森本 智子（委員長）

青木 美保、大島 丈志

〕〔信時 哲郎、山本 昭彦

発行所

宮沢賢治学会イーハトーブセンター

〒0550004 岩手県花巻市高松一〇一

電話（〇一九八）三一一二二六

FAX（〇一九八）三一一二二三

URL <http://www.kenji.gr.jp>

メールアドレス kenjinfo@kenji.gr.jp

ている。「マタノイノ木」にとまらす。他の一西畑作品のテキストと「印度撮影帖」との対照分析は興味深いが、今後の研究に譲りたい。

- 1 片山章雄「大谷探梅の動と大谷尊重（光明・渡辺哲信）二東海大学文学部紀要」77号、二〇〇二年。
- 2 金子民雄「宮沢賢治・童話と詩の舞台」（れんが書房新社、一九七九年）。

第四回宮沢賢治国際研究大会 研究発表要旨

宮沢賢治作品に潜む〈隣人愛〉の概念

…「グスコブドリの伝記」の主人公ブドリの〈行動〉を中心に

プラット・アブラハム・ジョージ

（インド・ニュー・デリー・ネルー大学 日本語文学文化研究科教授）

はじめに

宮沢賢治の代表作として「雨ニモマケズ」という詩を取り上げる読者・研究者が大勢いる。それはなぜかというところ、おそらく賢治の人道主義的な世界観・人生観に基づいた寛大な隣人愛の心がこの詩に表現されているからだろう。賢治のこの人道主義的な世界観は、「銀河鉄道の夜」「グスコブドリの伝記」など他の幾つかの名作にも顕現されている。他人・隣人の幸せを願う、賢治の人道に基づいた世界観の起因は法華経にあるという説が最も有力だが、浄土真宗やキリスト教などの影響も否定できないほど大きいと言える。賢治の作品に潜んでいる哲学と思想は、法華経的な利他主義、浄土真宗的な他力本願説、キリスト教的な隣人愛

の概念、インドのアドオイタ哲学の「不二一元論」¹を思わせるような宗教思想および自然科学の功利主義から影響を受け、形成されたようである。こういう賢治思想の根源を探るとき、彼の思想・哲学の全てが盛り込まれている、「雨ニモマケズ」、「春と修羅」の「序」の詩、「農民芸術概論綱要」という三つの作品に具現されている哲学を参考に、諸作品の分析解釈を行うべきだと思う。

筆者は「グスコブドリの伝記」の主人公であるブドリの自己犠牲的な行為は「隣人愛」に基づいたものではないかと以前から思ってきた。ブドリの殉死は、「菩薩の捨身供養」であるとか「自家族に対する愛」の表現であるとかと言う先行研究がたくさん出ている。法華経と浄土真宗の教えを踏まえて行われているこれらの先行研究者の理論や主張に基本的に筆者も同意する。しかし、私が賢治の幾つ

かの作品に見られる自己犠牲的な行為にはキリスト教の隣人愛の概念とヒンドゥー教のアドイダ哲学のようなものもみられるのではないかと疑問を持ち、それを仮説として研究を続けている。アドリの行為と殉死は、自己の存在を否定した一人の人道主義者の「隣人愛」に基づく利他主義的行為の施行に他ならないと筆者は心底に信じ込んでいる。

では、宮澤賢治の人道主義的な世界観の源はどこにあるのだろうか。厳格な浄土真宗の家庭の長男として生まれ育てられた賢治の心には、子供時代から生き物に対する慈悲と同情が芽吹き、後の大自然との絶え間ない接触のうちその芽が大きく生え伸びた。初めは浄土真宗の影響を受け、青少年期および青春期において法華經の教えに左右された彼の内心では、自分という現象はこの宇宙体系から切り離せない一つの複合体で、すべてがわたくしの中のみなのであるやうに／みんなのおおのなかのすべてですから、「自分」というものの単独的な存在は有り得ないという真実を抱えていた。つまり、個人の意識は宇宙意識の一部かそのもの自体であるが、同時に「私」という現象の中に宇宙全体が存在しているということである。このような状態の中で初めて皆の幸福があり得るのである。社会の一人として各人は他人の幸福を目指して行動することによる

この幸福を索ねよう 求道すでに道である」と説いたのであろう。

これはインドの「アドイダ」(Adaita) 哲学にすぐ似ている考え方である。「アドイダ」哲学によると、この世は非現実的で「マヤ」である。実存するものは遍在の「根本原理」、つまりブラフマン (Brahman) だけで、個人もブラフマンである。言い換えれば、自己意識(アトマン)も宇宙意識(ブラフマン)も一つとなっているということである。このようになると、個々の自己意識(アトマン)はすべて、いわゆる宇宙意識(ブラフマン)の部分となり、換言すると、私という個人の自己意識(アトマン)は他の人々の自己意識に入っている一方、他のすべての人々の自己意識が私の自己意識(アトマン)の中にも入っていることとなる。すべてがわたくしの中のみなのであるやうに／みんなのおおのなかのすべてですから」と歌う詩人の心理にはこの「アドイダ」哲学の思想が深く根付いているような気がしてやまない。そこで賢治が、自分という現象を(あらゆる透明な幽霊の複合体)と考えたのだろうか。

このように「自己意識」と「宇宙意識」(アトマンとブラフマン)が一体化した人の中に作動する感情は「慈悲」であり、「隣人愛」である。彼には「欲」もなければ、「期

て、「世界がぜんたい幸福になり」個人も幸せな人生を送ることができる。つまり、「世界がぜんたい幸福にならない」これは個人の幸福はあり得ない」のであるというのが、賢治の根本的な世界観であると言える。

しかしそのために、「自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化」していく必要がある。それは「古い聖者たちがふみまた教へた道」でもある。普通の個人にとってこの「自我」を捨てることは簡単ではない。そのためになり修行が必要となる。ここで賢治が言っている「古い聖者」とは、おそらくインドや中国や日本の昔の修行者を暗示しているのだろう。中には自分の悟りや、自分が菩薩になることだけを考へて行動する者もいようが、賢治の考へている修行とは、「世界が一の意識になる」ための修行で、その段階までたどり着いた人間には「己・我」というものは存在しなくなる。つまり、自己意識と宇宙意識は不二であることを悟り、「己・我」を捨てて、無執着で他人の幸福を目指してふるまう人間にしか利他主義的な、隣人愛に基づいた行動が出来ない。それで賢治は「農民芸術概論綱要」の中で「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある／正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである／われらは世界のま

待」もなく、どんなに馬鹿にされても憤慨せず、木偶の坊で、「イツモシツカニワラツケル」顔で、人の世話をする

ここです、自己犠牲」とは何か、「自己否定」とは何かを考える必要があると思われる。「自己犠牲」をおそらく自分以外の人の幸せ、あるいは国の発展・経済的成長などをめざして自分自身の利益、幸せを自分で進んで放棄することと言えるが、場合によっては、自分の命までを犠牲にすることもあろう。「般若心経」(Prāṇa paramitā śūtra) では自己犠牲とは自己を放棄することで、自我を捨て、無我到普遍的になり、宇宙意識の一部となることである。法華經によると自分の幸せを犠牲にして他人に幸せをもたらし「利他心」を持つことである。この利他心ほど尊い真理はない。つまり、仏教の教えの真髓は同胞に対する同情と慈悲に基づいていることが分かる。それに対して、キリスト教の教えでは、人類の贖罪のために十字架に磔になった救い主(救世者)イエス・キリストの自己犠牲は人類への「愛」の象徴で、「愛」こそがすべての元となる。つまり、自分の命を人のために捨てる以上の尊い愛はない。

アドリの隣人愛に基づいた自己否定的・自己犠牲的殉死

栗原敦はアドリの死を、「たくさんのアドリのお父さん

やお母さん、たくさんのブドリやネリ」への激しい愛の表れであると説き、秋枝美保は「父母の死によつて生を得たブドリが今度は自らの死をもつて他の生命の存続を助ける」のだと説いている。⁶それに大島は、「ブドリの中で両親に対する感謝の気持ち」があつたので自己犠牲的な行動をとつたと評している。⁷

いずれの場合も、ブドリの殉死は自分の周りにいる同期たちに自分が経験したような苦悩を経験させたくないから、彼らの幸福のために自己犠牲的な死を迎えたのだという響きがある。つまり、もしブドリが子供時代に親を亡くし、妹と家を失わなかったら、利他主義的な行動をおそらくしなかつたろうという逆説の余地もこれらの論説に潜在している。はたして、ブドリが自己犠牲的・自己否定的な殉死を選択した裏には子供時代のつらい体験や親への感謝の感情が本当の理由として潜んでいるのか、それともブドリはこんな生れつきの性格の持ち主だつたのか、疑問に思わざるを得なくなつた。賢治の思想・哲学は、生前に彼が携わつてきた、浄土真宗、法華経、キリスト教と言う三つの教えによつて形成されたもので、長い迷いの挙句具体化した自分のその思想や宇宙観をブドリと言う理想人物を通して表現したものに違いない。つまり、ブドリの子供時代の辛い体験の有無を問わず、作品の中のブドリの思想と、

それを、「私は一人一人について特別な愛といふようなものは持ちませんし持ちたくもありません。さふいふ愛を持つものは結局じぶんの子どもだけが大切といふあたりまえのことになりますから。」と言つて正当化している。何か特別なものに執着を持ったり、あるいはある一人の人間にだけ愛着を持ったりすると、本当の意味での隣人愛に基づいた行動はできないことは確かである。つまり、ブドリという人間の自我の意識は「個人から集団社会宇宙と次第に進化」して、最後に隣人愛へと進化していたのである。結論的に言うと、ブドリの行動は隣人愛に基づいた自己否定的・自己犠牲的な行動であつたと言えよう。

隣人愛を思わせるブドリの行動

隣人の幸福はブドリの人生の唯一の目的だつた。そのためにかなる手段を取るにも遺憾がちではなかつた。その第一段階として、自分の知識レベルを高めるために彼はてぐす工場の仕事が終わつた後で新たな学問の道をたどり始めるのである。

「ブドリが次の日、家のなかやまわりを片付けはじめましたらてぐす飼いの男がいつも座つてみた所から古いボール紙の函を見附けました。中には十冊ばかりの本がぎっし

その作家である賢治の思想は全く同じものになるはずだと言つても間違ひではなからう。

実は、両親を失い、見ず知らずの人に妹が攫われ、住んでいる家がてぐす工場の主人に奪われたときのブドリの反応は受動的で、しかも無頓着であつた。ブドリにとって両親や自家への執着よりも大切なものは隣人の幸せだつた。自分の家がてぐす工場に変わったことを知つたとき、憤慨するどころか、驚きの表情さえ顔に表れなかつた。逆に、てぐす工場の主に雇われたことを嬉しく思い、彼の指図に丁寧に従つている。そして、「その晩ブドリは、昔の自分のうち、いまはてぐす工場になつて建物の隅に、小さくなつてねむりました」この「小さくなつてねむりました」には非常に深い意味が含んでいゝと思う。自分と言う個人の幸せな存在を否定して、他人の幸福ばかりを念頭にしているブドリの心がそこに映つている。

人（隣人）の世話に携わる者は自ら小さくならないと自己否定的な世話ができないのである。「怒ハナク／決シテ願ラズ／イツモシツカニワラツテキル」ブドリは、自分の家族、財産、人生などについて一度も思い煩つたことはない。「タスコブドリ」の伝記」は「ありうべかりし賢治の自伝」（栗原敦氏）だと言われるが、考えてみれば賢治もブドリのように生涯独身生活をおくつたのである。賢治は

り入つて居りました。聞いて見ると、てぐすの絵や機械の図がたくさんある。まるで読めない本もありましたし、いろいろな樹や草の図と名前の書いてあるものもありました。ブドリは一生けん命、その本のまねをして字を書いたり、図をうつしたりしてその冬を暮しました。」¹⁰

これはブドリの新たな学問の始まりであつたが、間もなく農民の赤ひげに雇われ、稲作に励むようになると、自習の方が一旦中止されるのだが、今度赤ひげの主人からもらった書物を使つて再び独学を始めるブドリの頭にその時あつたのは、早や冷夏に伴う飢饉で苦しむ隣人たちの生活を何とかして引き上げることばかりだつた。赤ひげの補佐として水田で稲作に働んだ彼の献身的な仕事ぶりを見ると、まるで自分自身の田圃で、自分の家族のために勤勞しているような感じを受ける。そして、イネ（オリザ）に病気がかかつた時、主人よりもブドリの方が一層悲しかつた。「ブドリは主人に云われた通り納屋へ入つて睡らうと思ひましたが、何だかやつぱり沼ぼたけが苦になつてしかたないので、またのろのろそつちへ行つて見ました」¹¹ここに出てくるブドリの頭の中に自他の区別がなく、自分も他人も一つだという思想が浮き上がつていゝと思う。つまり、彼にとっては、宇宙上の全ての人間は互いに交り合つて、一体化している。すべてがわたくしの中のみんなである

やうにみんなのおのおののなかのすべてですから」と歌った賢治の人道主義的な思想が現れているような気がする。これはおそらく法華経の「一念三千」論に由来した思想であると説く学者¹¹⁾もいるが、いずれ、賢治の目には「自己」も「他者」も一つになっており、他人（隣人）を自分より大切にしない限り世界せんたいが幸福にならない。

アドリの他人（隣人）思いがより明確に表れている文章として、作品の中に次のようなところがある。クーパー博士の所へ勉強しに赴いたときのアドリの感情である。「アドリはいろいろな思ひで胸がいつぱいでした。早くイーハトーヴの市に着いて、あの親切な本を書いたクーパーという人に会ひ、できるなら働きながら勉強して、みんながみんなにづらい思ひをしないで沼はたけを作れるやう、また火山の灰だのひでりだの寒さだのを除く工夫をしたいと思ふと、汽車さへまどろこくつてたまらないくらゐでした」¹²⁾。ここに出ているアドリの感情の中には「自己救済」の思考は全くない。あるのはただ自分の周りに苦しんでいる人々の救助だけである。つまり、〈東ニ病氣ノコドモアレバ／行ツテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母アレバ／行ツテソノ種ノ束ヲ負ヒ〉たがる賢治の感情がそのままアドリの感情に映っているのではないか。

クーパー博士の所へ行き、彼の推薦でペンネン老技師

に師事しながら火山局の仕事に身をささげたアドリは、新たな農業技術や肥料の雨を降らす方法などを利用して、農民の暮らしを少しでも向上させることばかりをやってきた。その結果、数年間農民の農作物の収穫が豊富になり、飢餓と飢饉の恐れが減ってきた。その時のアドリのうれしさには限界がなく、「はじめてほんたうに生きた甲斐あるやうに思ひました」¹³⁾。

しかし、再びやってきた冷夏がやってくる、アドリが誰よりも悲しくなった。他人の苦痛を自分自身の苦痛として受け取ったアドリはそこで自分の習得した知識を生かして大気温度を高める工夫を施行したのである。それは、カルボナード火山島を爆発させ、そこから出る炭酸ガスのせいで大気温度を上げ、米の栽培にふさわしい気候を人工的に作り上げるといふ工夫だった。しかし、島の爆発時にその最終操作を操る人がどうしても命は助からないという前提条件がある。アドリはその宿命を自分で進んで受け取る。つまり、皆に幸せをもたらすために、アドリが自分の命を捨てようとしたのである。アドリには逃げ道は幾つでもあったが、彼は決して逃げようとはしない。逆に、喜んでこの道を選んだ。その裏にはおそらく現実世界にて極楽浄土を実現することができるという法華経の教えと隣人愛を主張するキリスト教の影響が働いたのではなかろうか。

終わりに

話の最後当たりのアドリの自己犠牲の決心の言葉には自己否定に満ちた隣人愛の色彩が濃く見られる。自分のただ一人の親族である妹ネリに久しぶりに再会できたのに、残っている自分の人生を楽しく暮らすことを考えないで、進んでカルボナード火山を爆発させ、そのため殉死するという真実を堂々と選択したアドリの行動には、隣人の幸福ばかりを人生の目的にしている救済者の面影が見られる。しかし、最終決定をとるときアドリの謙った態度は、平凡の人間にないものである。そして、「私のやうなものは、これから沢山できます。私よりもつともつと何でもできる人が、私よりもつと立派にもつと美しく、仕事をしたり笑つたりして行くのですから。」¹⁴⁾といて、自分の人生の最終目的を果たすのであった。

註

(1) アドオイクタ哲学の「不二二元論」とは、八世紀ごろインドで広がった思想で、絶対存在である神と個人の靈魂は同一のものであると主張する論説。

(2) 宮澤賢治「春と修羅」の「序」〔新〕校本宮澤賢治全集 第二

巻 筑摩書房、一九九五年、八頁

(3) 宮沢賢治「農民芸術概論綱要」〔序論〕〔新〕校本宮澤賢治全集 第十三巻 筑摩書房、一九九七年、九頁

(4) 同右

(5) 栗原敦「賢治童話名作館 グスコリアドリの伝記」〔国文学 解釈と教材の研究〕 第三二巻第六号臨時号 学燈社、一九八六年、一四五頁

(6) 秋枝美保「グスコリアドリの伝記」論〔国文学 解釈と教材の研究〕 第三二巻第六号臨時号 学燈社、一九九二年、一〇四頁

(7) 大島丈志「グスコリアドリの伝記」論「『家族』と『死』の観点から」〔千葉大学社会文化科学研究プロジェクト報告書第61集「日本近代文学と家族(2)」所収

(8) 宮沢賢治「グスコリアドリの伝記」〔宮沢賢治全集8〕筑摩書房、一九八六年、二三七頁

(9) 宮沢賢治 書簡：252a、〔日付不明 高瀬露あて〕下書〔昭和四年〕、〔宮沢賢治全集9〕筑摩書房、一九九五年、三四四頁

(10) 宮沢賢治「グスコリアドリの伝記」〔宮沢賢治全集8〕筑摩書房、一九八六年、二三九頁

(11) 前掲書 二四四頁

(12) 松岡幹夫「宮沢賢治と法華経：日蓮と親鸞の扶間で」昌平堂出版会、二〇一五年、一〇四頁を参照。

(13) 宮沢賢治「グスコリアドリの伝記」〔宮沢賢治全集8〕筑摩書